

2021年11月果実概況

北日本でかなりの気温高、降水量は北日本・東日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。

11月の始まりは寒気の影響が残り朝晩は冷え込んだが、気温は平年並みに推移した。11月7日は暦上「立冬」、街路樹も色づき始めるところも多くなり、関東平野部は中下旬から紅葉が始まった。

果実全体の入荷量は前年比96%、価格380円(110%)。果実販売の中心は「みかん」「りんご」「柿」となるが、「いちご」「西洋梨」の出荷も多くなる。「柿」は「たねなし柿」が前進出荷によって平年より少なく、「富有柿」中心の販売になる。「西洋梨」は「ラ・フランス」中心の入荷で「ル レクチェ」は前年に比べ早く下旬から販売開始となる。「いちご」は日を追うごとに入荷量は増えるが、冷え込みによる生育の遅れが顕著になった。

みかん類は、入荷102%、価格283円(99%)。「極早生みかん」は降雨の影響で一時低糖が見られ引合いが弱く販売苦戦が続いたが、9月以降の干ばつで糖度が回復始め、「早生みかん」の引合いは強まる。品質は良く小玉比率高めのみな進み、台風等の天災被害もなく、前年並みの出回りとなる。

りんご類は、入荷79%、価格386円(137%)。「早生ふじ」の販売から徐々に「サンふじ」の販売へと変わっていくが、春先の天候不順により、各地各品種の生産量が少なく冷え込みも早まる。着色は良好で品質は良い中、販売が進む。

日本なし類は、入荷142%、価格449円(91%)。新潟・長野産については、春先の天候不順により、生産量減少したが、栃木産は猛暑の影響で少なかった前年に比べ多かった。

西洋なし類は、入荷75%、価格は351円(109%)。山形産「ラ・フランス」は10月下旬より販売が始まり11月の販売量は上中旬まで前年を上回る量となるが下旬からは、出荷量は減少傾向に入る。肥大は良いものの小玉の出荷も計画より多い、前年に比べ7割の出荷量、11月末でほぼ切り上がった。新潟産「ル レクチェ」は11月19日から販売が始まったが、生育順調で各JAの出荷も出揃う。11月の販売量は多くギフト商戦には早くから参入でき、引合いはやや強め。

かき類は、入荷90%、価格351円(109%)。主力の「富有柿」については、福岡産が11月1日から販売開始、成りは良いが、干ばつを受け小玉傾向の出荷。「たねなし柿」については、和歌山産の前進出荷続いたことで切り上がりも前進。新潟産については前年ほどではないが「たねなし柿」の出荷量が少なく11月末まで販売ができなかった。「次郎柿」は愛知ほか前年の出荷は多かったが本年は減少。

ぶどう類は、入荷94%、価格1,921円(104%)。「シャインマスカット」は長野産の出荷量は少ない。露地物の生育時において天候が悪く正品率が落ちた。11月中旬から貯蔵物の販売が始まった。青森産「スチューベン」は天候不順の影響を受け、減少。

いちご類は、入荷181%、価格1,975円(88%)。10月中旬から栃木・静岡産の出荷が開始。各地7月の長雨の影響で少なかった前年に比べ本年は天候が良く、生育順調から前進出荷が11月いっぱいまで続き、数量は8割強の増加。

メロン類は、入荷138%、価格844円(84%)。主力は西南暖地に切り替わる。夏の曇雨天の影響を受け、静岡・高知産ともに作柄は不良だったが、徐々に回復に転じる。

干し柿は、入荷 105%、価格 2,011 円(97%)。主力山梨産は 8 月の長雨により原料が少なく、豊作基調だった前年に比べて減少。10 月 31 日から販売開始した富山産「あんぽ柿」「干し柿」ともに原料の生育は良く、加工工房が新設されたことから出荷量は増加した。